

## 巻頭言

## 変革期を迎えた歯科技工士教育

学校法人明倫学園 理事長

古田 正憲



21世紀を迎え、わが国は今、大きな変革期を迎えており、種々の分野で構造改革が迫られている。医療を取り巻く環境も例外ではなく、少子高齢化にともない将来の社会保障が崩壊寸前の危機的状況であることから医療制度を構成する保健医療システム、診療報酬体系、高齢者医療保険制度の改革を柱に全てのシステムの大転換が求められている。これらの困難を打開し、将来への展望を開くためには単なる財政的な処理ではなく、より良い医療を提供していくために、医療技術の進歩や、カルテ情報の開示、インフォームドコンセントの要請など国民意識の変化をベースに構造的、制度的問題を解決する新しいシステムをつくることが必要である。

国民皆保険制度を維持するため歯科医療の一翼を担ってきた歯科技工士、歯科衛生士もこれらの変化を意識し、より一層地域医療、高齢者医療、福祉に貢献することが期待されている。歯科技工士、歯科衛生士の養成教育については医療技術の高度化とニーズの多様化を軸として長い間修業年限やカリキュラム等の改革が関係者により論議されてきたが、歯科医療従事者養成教育の改革に最大限の努力をすることで、歯科医療の再生につなげる道が開けると考える。

歯科技工士養成教育については、歯科技工士が医療の直接の担い手でないことから、その教育は技工学の基礎に重点を置かざるを得なかったが、これからは、この基盤の上に実践的な歯科技工学を構築していかななくてはならない。歯科技工士も医療人としての人間性の涵養や歯科医師、歯科衛生士と密接な信頼関係を保ちつつ患者の為の医療を実践していくための関係者との連携、役割分担、技工士としての資質の向上に努力

していく必要があろう。一昨年厚生省健康政策局に「歯科技工士養成の在り方等に関する検討会」が設置され、その検討結果が平成13年3月23日に意見書としてまとめられた。これによると(1)教育内容の大綱化と単位制の導入(2)教育内容の見直しと新たな教育内容(3)修業年限の延長(4)1学級あたりの定員の見直し等の具体案が示され、専門分野の強化、臨床歯科技工学の創設など、医療人としての責務と役割を果たす視点を求めている内容は評価できる。

本学は平成9年に40年間の専門学校教育から2年制短期大学に昇格する段階で、それまでの指定規則と現状の教育内容を見直し、新カリキュラムをスタートしたが、その後平成11年には学科での2年の基礎教育の上に更に発展的な教育を行う2年間の専攻科生体技工専攻を設置、4年間の教育課程を編成し、この意見書に提言されている内容も盛り込まれ、先導的な試行に着手、実践しているところである。

新しい歯科技工学の体系化には、これまでの基盤の上に、工学、情報科学、理学など異分野からのアプローチによる総合力での再編と改革が必要であろう。シミュレーションによる加工、解析など修復物の再評価に役立つ研究成果も本学からでており、教育に還元している。

学生の将来に何が役立つのかを考え、実践することが大学の使命と教員の役目であるならば、教育の実質を決定づける教員の資質を高めることも重要である。歯科技工士、歯科衛生士専任教員による学内外の研究発表活動も継続的に行なわれ、根づいた感があるが、大学としてもこれらの活動を全面的に奨励、支援すべく関係規程を整備し中身の充実をはかっている。13年

度社会人特別選抜大学院博士課程に専任教員 1 名の進学が実現している。

本誌も平成 9 年に第 1 巻が創刊されて以来、今回で第 5 巻が発刊されることとなったが、共同研究や教育の成果を学術論文としてまとめ、歯科技工学、歯科衛生学の確立の意義と必要性を示していることは大変重要なことである。これからは更に研究成果を産学共同により現場の医療に生かしていくことを願っている。

社会に役立つ大学として明るい未来を作ることに貢献しうる教育、研究機関の一端を担えることを目指していきたい。本誌がより多くの賛同者を得て、21 世紀の歯科医療、福祉の発展のために寄与していくことを願い、今後も紀要委員会を始め、教職員、卒業生、学生の皆さんの大いなるご努力を期待し、発刊のご挨拶とさせて頂く。